

研究ノート

ウェズレー・C・ミッチェルの経済行動の概念

齋藤宏之

概要

W. C. ミッチェルは、その論文「人間行動と経済学——最新文献概観——」において、まず心理学の機能主義的様相に照らして、習慣ならびに制度が、本能から発生する過程を丹念にたどり、そして人間の原初的性質が、経験を重ねていく過程で修正される点を明確にした。生得能力は、累積的变化の過程を通して養育されるから、人間性の変化は大部分が文化の進化によるものであると捉えた。その考えを足掛かりとして自然科学の方法に倣いつつ、さらに今度は行動を適切に説明すべく、本能的行動よりむしろ制度的行動に注目していった。こうした行動主義的思考に沿って、変化しつつある制度に現れる行動の理論を構築し、実証科学を展開した点について検証した。

キーワード：制度変化、経済行動、人間性の概念

I ミッチェルの制度主義

ソースタイン・B・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen) は、アメリカで19世紀末に制度学派の基礎を築いた¹⁾。そのヴェブレンに追随し

た世代の制度主義者のなかで、特に注目すべき経済学者として、ウェズレー・C・ミッチェル (Wesley Clair Mitchell) を挙げねばならない。

ミッチェルは、経済学が人間行動の科学となるだろうと考え、認識論的立場から組み立てる均衡経済学を越えて、経済理論の範囲を拡大した。要するに理論的推論を枢軸として、「……精神的な安らぎや実際の指針を求め、……事実の域をはるかに越える理論を作り上げるのが常であった²⁾」既存の経済学に対し、批判的態度を取ったのである³⁾。

ミッチェルは、現実の世界の経済を把握すべく、正統派経済学が用いた均衡概念の代わりに、過程の概念を用いた。それは、制度が漸次変化してい

2) “Letter from Wesley C. Mitchell to John Maurice Clark, August 9, 1928,” in John Maurice Clark, *Preface to Social Economics: Essays on Economic Theory and Social Problems* (New York: Augustus M. Kelley, 1967), p. 412.

3) ボウ・サンデルリン (Bo Sandelin) とハンス＝ミヒャエル・トラウトヴァイン (Hans-Michael Trautwein) は、こう述べる。

「アメリカ制度学派は、伝統的な制度主義全般と同様、消費者嗜好や科学技術によって決定される合理的行動の産物に、新古典学派が制度を還元することに対する批判に基づいていた。それどころか制度主義者は、嗜好、科学技術および経済行動が、制度によってどのようにして形作られるかを説明しようとした。その際、制度主義者は、制度の定義を『社会秩序』を構成する『思考習慣』・規則・組織体系まで拡大した。その結果、制度の進化は、社会が経済を統制する体系であるとの理解に関心を示した。」Bo Sandelin and Hans-Michael Trautwein, *A Short History of Economic Thought* (London: Routledge, 2024), p. 71.

1) Cf. Malcolm Rutherford, *Institutions in Economics: the Old and the New Institutionalism* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996); David Dequech, “The Demarcation between the ‘Old’ and the ‘New’ Institutional Economics: Recent Complications,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 36, No. 2, June, 2002, pp. 565-572.

る社会現象であり、古典派・限界主義経済学を基礎づける自然法では分析することができないからである。つまり、自然法の伝統下にある統一性・安定性より多様性・変化を重要視し、動態的過程、制度的・累積的变化を強く意識した。抽象的演繹的推理という形式主義に反対し、普遍的に妥当な道理でもなく、正常あるいは自然状態の探求でもなく、進化的変化に注意した。

社会経済の変化過程を特徴づける制度を研究する際、ミッチェルは、行動の研究に適切な自身の実証的・経験的・統計的分析に照らして、経済活動の習慣の根拠に注目した。過去の行動を歴史的かつ統計的に研究することを通して、集団活動の客観的記録を蓄積し解析する。換言すれば、量的系統に沿って行動を観察し、広範な実証・統計分析を利用しつつ、制度、その進化・機能を経験的に検証したと言える。

ミッチェルの考えでは、感情・行動・思考習慣、標準的な行動は、共同社会が是認しており、制度に埋め込まれている。ミッチェルは、制度の起源と変化について、取り分け貨幣経済との関連を重視した。近代経済体制の働きを理解するうえでの鍵は、財貨生産が金儲けに従属させられている点にあることを看破し、伝統的な接近法に頼ることなく、量的研究によって景気変動を分析した。その際、既存の景気循環理論を見直し、経済組織を概観し、様々な経済要因を統計的に検討し、さらに膨大な統計データを蒐集した。それらの分析を通して経済変化を見極めていくうえで、20世紀初頭に用いられた自然科学の物理学や化学の方法に倣った。

アーサー・F・バーンズ (Arthur F. Burns) は、ミッチェルの研究成果である『景気循環』(*Business Cycles*) を「綿密に熟考され、見事にまとまった専門書⁴⁾」と評し、「アルフレッド・マーシャル

(Alfred Marshall) の『経済学原理』(*Principles of Economics*) からジョン・メイナード・ケインズ (John Maynard Keynes) の『雇用・利子および貨幣の一般理論』(*The General Theory of Employment, Interest, and Money*) に至るまでの研究で、西欧諸国の経済思想に、これほど大きな影響を及ぼしたものはなかった⁵⁾」とすら述べている。ミッチェルは、現実の企業経験を記述的に分析し、帰納的研究成果を体系的に説明することで、「事実に基づく研究にめったに着手していない⁶⁾」ヴェブレンの統計的検証の不完全な点を是正した。

ミッチェルは、経験的検証に対する新たな方向性を制度主義に付与するに至った。「ミッチェルの及ぼした影響力は、経済思想史における名誉ある不動の地位を築くほど極めてあまねく行き渡った⁷⁾」とはけだし至言である。また、ジェフリー・H・ムーア (Geoffrey H. Moore) が、分析および制度の概念・観念・方法のなかにはミッチェルが創始・展開し、しかも今も変わることなく存続しているものがあることを想起させた事実は見逃すことはできない⁸⁾。

ミッチェルは上述した通り、経済学を行動の科学と考えていることが分かる。よって経済学との関連で、人間行動をその当時の最新の研究動向に照らして、どのように捉えているのか、その思想形成過程を明確にすることは、ミッチェルの経済思想の核心に接近するうえで重要な研究課題となってくる。そこで本稿では、ミッチェルの論文「人間行動と経済学——最新文献概観——」(“Human Behavior and Economics: A Survey of

5) *Ibid.*, p. 23.

6) Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950), p. 302.

7) Ben Seligman, *Main Currents in Modern Economics* (New Brunswick: Transaction Publishers, 1990), p. 200.

8) Geoffrey H. Moore, “Wesley Mitchell in Retrospect,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 12, No. 2, June, 1978, p. 277.

4) Arthur Frank Burns, “Introductory Sketch,” in *Wesley Clair Mitchell: The Economic Scientist*, edited by Arthur Frank Burns (New York: National Bureau of Economic Research, Inc., 1952), p. 23.

Recent Literature”⁹⁾を取り上げて検討することとした。

II 人間行動と経済学

ミッチェルによると、快楽主義は誤った考えに基づく心理学であるが、デイヴィッド・リカード (David Ricardo) とウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ (William Stanley Jevons) の経済学は、まさにその快楽主義的先入観に基づいている¹⁰⁾。彼らは、心理学上の土台が経済学に関わらないとし、経済理論を選好とか選択という単純な事実に基づけるのが一般的であった¹¹⁾。その考えに追随している研究者にミッチェルは、フィリップ・ウィックステッド (Philip Wicksteed), シドニー・チャップマン (Sydney Chapman), ヴィルフレド・パレト (Vilfred Pareto), ジョゼフ・シュムペーター (Joseph Schumpeter), フランチシェ

ク・チュヘル (František Čuhel), ハーバート・J・ダヴェンポート (Herbert Joseph Davenport) らの名を挙げている。

経済理論が心理学と無関係ならば、人間性に関する最新の文献サーベイは的外れであろうが、ミッチェルの考えによると、これは必然的な帰結ではない。経済学者は心理学を取り入れているばかりでなく、心理学に貢献しているからである。

ミッチェルはまず、文化と人間性の進化を扱うモーリス・パーミリー (Maurice Parmelee) に注目した。

パーミリーは、「知的行動は、……向性、反射行動、本能的活動から成り立っている。向性、反射行動、本能的活動は、経験の結果として新しい方法で組み合わせられている。目的は、新しい形態の行動を構成することである¹²⁾」と述べている。これは中枢神経系を必要とし、知性は個人の経験によって決まる。社会学者は、生物学的見解より心理学的見解に重点を置き、解剖組織上の機構よりむしろ活動それ自体が帯びる特徴に関心を持っていた。

ミッチェルのエドワード・L・ソーンダイク (Edward L. Thorndike) 解釈によれば、人間性は可塑的である。原初的本能の間で組み合わせを作ることによって、成長した生活活動は経験による修正を受けた。

養育は、生得能力のなかで極めて多様な組み合わせを作ることができると同時に、生得能力の形を修正することもできる。人間性における本源的要素は多種多様であり、人間性が養育に帰する役割は強力であることが分かってきている。養育が本源的要素を選択し組み合わせ修正する。社会見識が増大すれば、それは常に次世代に供せられる養育を改善する際に用いられる¹³⁾。

9) Wesley C. Mitchell, "Human Behavior and Economics: A Survey of Recent Literature," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 29, No. 1, November, 1914, pp. 1-47.

10) 限界効用理論は、制度主義者の考えでは、心理学とは無関係であり、行動は選好が合理化しようとし、合理的選択が演ずる役割を強調した。現実の世界と乖離してしまい、狭隘な人間行動論あるいは限界効用計算を用いて、限られた範囲の問題しか論じなかった。経済法則を人間性の唯一の基本的法則、つまり最大効用の法則から引き出したからであった。—— Cf. Shira B. Lewin, "Economics and Psychology: Lessons for Our Own Day From the Early Twentieth Century," *Journal of Economic Literature*, Vol. 34, No. 3, September, 1996, pp. 1293-1323.

11) ミッチェルは、その論文「経済理論における貨幣の演ずる役割」("The Role of Money in Economic Theory") においてはこう述べる。

「マーシャル博士は、その著『原理』のより新しい版では、効用『あるいは快楽』を効用『あるいは便益』に変え、消費者余剰を『余剰快楽』の代わりに『余剰満足』と定義し、ジェレミー・ベンタム (Jeremy Bentham) の快楽に対する近接性・確実性の論述について言及することを止め、『経済学者は、快楽主義あるいは功利主義の哲学体系の信奉者であるという信念』に異議を唱える注を書き入れた。」 W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 155.

12) Maurice Parmelee, *The Science of Human Behavior: Biological and Physiological Foundations* (New York: The Macmillan Company, 1913), p. 258.

13) W. C. Mitchell, "Human Behavior and Economics," p. 11.

ミッチェルは、方法の問題におけるグレーアム・ウォーラス (Graham Wallas) の貢献が、自らの心理学的分析を「複合素質」に基礎づけようとした点にあると捉えている。

人間性は、「虚点になる。そこから経験の及ぼす影響が起こると考えることができる¹⁴⁾。」このウォーラスの陳述は、ミッチェルの考えでは、複合素質に照らせば誤りではないかという。愛国心や権力欲は、後天的要素のない気質とみなすことができるのか、何らかの複合素質は、生得の要素から完全に成り立っているのかといった点で疑問が残るからである。これらの疑問に対してウォーラスは、「気質は、それ自体で考えると同質的であるように見えるが、気質を刺激との関連で考察すると、独立して変化する多くの性癖から成り立っているのが分かる¹⁵⁾」と主張して応えた。しかし原初的な性癖の間での組み合わせは、それ自体が原初的であるのか疑わしいため、ウォーラスは単独の複合素質の結果として扱われると、素質は後天的要素を排除するように用いることはできないとミッチェルは考えたのである。

そしてウォーラスの真意を汲み取りつつ、彼が複合素質の規定する行動において、後天的要素を捨象し裸出の性癖を扱っている点を指摘した。恐怖、愛、略奪は裸出の原初的性向ではない。これらの性向は生まれたときから、他人と接触することで譲り渡され標準化されてきたものである。

この点に注意しなければ、「大社会」の必要条件と穴居人の要素からなっている人間性との間の社会心理学上の不調和を見逃すことになる。ミッチェルはいう。それゆえ複合素質を後天的要素がないものとして扱うことはできない。

こうした分析の特徴として、ミッチェルは本能と知性の関係の論述を指摘した。もって生まれた

考える性癖は、原初的であり独立しているという点で、ソーンダイクとウォーラスの見解は一致していると見ている。

ミッチェルは、ヴェブレンの課題を「制度はいかなる性質を帯び、制度の成長を引き起こしているのは何であるかを研究すること¹⁶⁾」に見いだした。そのなかで、ヴェブレンの「陳腐な『本能』にまさる名称は利用できない¹⁷⁾」とする考えを、彼の所説に沿って次のように取りまとめた。

ヴェブレンは、本能を「複合官能基」と考える。そしてこの官能基には、「人間性の単純で心理的な既約元」が含まれている。これはウォーラスの「複合素質」の考えに類似しており、パーミリーやソーンダイクとは異なる。本能の構造よりむしろ機能に重点を置いている。本能は「客観的努力目標」を明示するがゆえに、本能的活動は目的的であり知的である。これが本能的活動を向性と区別し、自動性の範疇から排除した。本能は「文化が成長する、その互譲において¹⁸⁾」機能すると言える。

本能は、文化のなかで第1の重要な構成要素となり、知性や習慣を通して本能的行動を修正することは、第2の重要な構成要素となる。このような修正は累積的であり、世代から世代へと伝えられ、後天的要素はそれぞれ新たに獲得する土台となる。この性質を帯びているのが、伝統的風習、慣習、因習、先入観、行為規準、一団の知識である。その知識に含まれるのが、製作が起因する科学技術の慣習的体系である¹⁹⁾。

本能の変化は僅かであるのに対し、「人間生活の習慣的要素は絶え間なく、そして累積的に変化する²⁰⁾。」それによって、安定した本能と進化した

16) Thorstein Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* (New York: The Macmillan Company, 1914), p. 1.

17) *Ibid.*, p. 3.

18) *Ibid.*, p. 2.

19) *Ibid.*, pp. 6-7, 38-39.

20) *Ibid.*, p. 18.

14) Graham Wallas, *The Great Society. A Psychological Analysis* (New York: The Macmillan Company, 1914), p. 23.

15) *Ibid.*, p. 60.

つつある制度との間に対立が生まれる。

ヴェブレンは、文化発展の要素を考慮しつつ、石器時代から20世紀にかけて製作本能の演ずる役割を考察した。

未開人の間では、年長者の慣習的規則やこれと関連する心の習慣、「製作の感覚の自己汚染²¹⁾」ゆえに、科学技術の進歩は遅々としていた。しかしヴェブレンが、科学技術を促進する要因を見いだしたのは、長頭ブロンドという最も新しい種族が、初期石器時代に突然変異によって現れたことであつた。その種族を特徴づける本能資質のなかでも、製作の感覚、親性、「企業の精神」を構成する気質が、相対的に強力だったからである。

事物は、その摂取過程で神々しさが失われ、その新たな所有者がより事実即した様式で使用できるようになる。それゆえアニミズムが製作を汚染することは、新しい種族の間ではたいしたことではないし、機械的な効率がより自由な役割を持った²²⁾。

こうして未開人の生活において科学技術が進歩したことにより、漸次自由な製作は、産業の金銭的な支配に取って代わられた。さらに富が、生計手段の必要物以上に蓄積されるようになると、所有権という新時代を画する制度が徐々に発展していった。所有権は、ほとんどが戦争指導者に帰属しており、よって支配権の概念に融合している。略奪制度の発展は、科学技術が進歩することによって起こり、製作本能に最も好ましくない形で作用する。このタイプの文化は、東洋の牧畜民の間で最も発達しているのが確認できる²³⁾。

西洋人は、東洋の牧畜民と比べ、より堅実に進歩することができた。西洋人の中で、金銭文化の略奪段階が、より早く商業段階に移行したからである。

手工業時代、製作本能が再び表立ってきた。し

かしまた「神人同形論的解釈に都合のよいように²⁴⁾」自ら汚染している。物質科学はスコラ哲学から発生し、名匠の造物主の概念となる。そして、名匠が作る自然の秩序の法則を発見することが、科学の務めとなった²⁵⁾。

製作の感覚はこのように歪められるにもかかわらず、科学技術は手工業体制のもとでかなり急速に進歩した。これにより、現在の文化を顕著に特徴づけている資本主義と機械過程が生み出されるようになった。手工業体制が道を開く資本主義は、自然権の法的・慣習的土台に依存しているため、より精巧な産業設備は企業の金銭的要件を増強し、資本家が産業の自由裁量権を有するようになった²⁶⁾。

ミッチェルは、ヴェルナー・ゾムバルト（Werner Sombart）にとって、経済史を主に特徴づけているのは「精神史」であるという。資本主義は、思考・活動習慣の明確かつ特有の複合体である。ゾムバルトは、この複合体が西ヨーロッパ文化のなかで、漸次どのように進化してきたかを示そうとした。

ミッチェルのゾムバルト解釈によれば、混血種である資本主義的精神は、営利企業の精神を市民の精神に交配することで育てられてきた。ゾムバルトは、この混血種が歴史的にどのように生み出されたか、そして社会が、なぜこの特別な方向に進化したのかについて、こう述べている。

「不当な高値の請求・海賊行為、呪術・錬金術、あらゆる種類の戦略的計画、高利貸し、賭博・賭博とほとんど異ならない思惑買いは、財宝を得ようとするはるかに『自然な』方法であり、資本主義が現れる前から常に大規模に行われていた²⁷⁾。」その間にも戦争、土地管理、国家・教会の運営において、資本主義的企業に欠くことのできない特

21) *Ibid.*, p. 52.

22) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 26-27.

23) *Ibid.*, p. 27.

24) T. Veblen, *op. cit.*, p. 242.

25) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 29.

26) *Ibid.*, p. 29.

27) *Ibid.*, p. 31.

性が、企業活動以外で発展しつつあった。

市民の精神に関して、勤勉・儉約・正直という徳は、15世紀のレオン・B・アルベルティ (Leon Battista Alberti) から18世紀のベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) に至るまで、人気のある道徳主義者が教え込んできた。また別の構成要素である合理的計算は、簿記が始まり、それが会計業務において実を結んだことで向上した²⁸⁾。

人々の心のなかに生じた資本主義的精神は、ゾムバルトによれば、本能の問題でもあり、性格の問題でもあり、知識の問題でもある。

ゾムバルトは、本能的能力がブルジョアジーの姿勢を根本的に築くとしているが、この能力の説明にミッチェルは首肯しない。なぜなら資本主義的精神の現象が、一定の遺伝「気質」に由来することを当然視するものの、気質の意味は明らかにしていないからである。ただ「企業家の性質」と「市民の性質」が表す特性は明らかにしている。この場合の特性とは、知性や意志と対照的に、如才なさ、決断力、感情の欠乏を指している。真のブルジョアジーは、生まれながらに知性と意志を共に有している。ゾムバルトは、人種のなかでケルト族と一定のドイツ部族、取り分けゴート族が、資本主義的活動の天賦の才が欠けているとみなした。企業の進歩が後れているのは、スコットランド高地人、アイルランド人、フランス人、スペイン人、ポルトガル人である。逆に、生まれつき資本主義的気質を大いに持っているとするれば、それはローマ人、ノルマン人、ロンバルディア人、サクソン人、フランク人である²⁹⁾。

ゾムバルトは、ブルジョアジーの徳を、主に宗教教育から引き出した。「カトリシズムは、最初から勤勉、儉約、正直という市民の徳を教え込んだし、合理的な生活行為を強く要求した。……そして教会は、その教えを修正し時代と共に進ん

だ³⁰⁾。」それゆえ、誰であれ企業の管理とリスクに関与するように迫られた。

プロテスタンティズムにおいて、教えの要素のなかで主たるものは、肉欲を制圧したり、トマス・アクィナス (Thomas Aquinas) が賞賛した市民の徳を遵守したりすることであった。怠惰、官能性、あらゆる種類の感興、乱費、芸術的関心は、神性のために非難された。しかし実際は、財力のために非難されたことが分かった³¹⁾。

ユダヤ教は、カトリック教と比べ企業生活に有利に働いた。清貧という理想は教え込まなかった。一方、合理主義を教える際は、カトリック教と比べはるかに徹底していた。したがってユダヤ教徒は、異教徒と取り引きする際、近代的な企業の道徳性を思うままに陶冶することができた。

生物学のおよび道徳的な資本主義の精神の源泉に加え、ミッチェルはゾムバルトの社会状況の論点を次のように指摘した。(1) 国家は様々な方法で、経済改革を妨害したり促進したりしてきたと考えられている。なかでも見逃されがちなのが、異教徒に対する国策である。国の社会・政治生活に参加することから閉め出されていると、企業利益に没頭することしかほとんど残されていない状況となる。(2) 生物学的・社会的理由から、移民は資本主義に極めて有利に働いている。(3) ペルーの銀やブラジルの金の流入が、貨幣経済の発展を早め、富を求める欲望を強め、投機熱を蔓延させた最も重要な要因である。(4) 産業技術が改善することは、企業の想像力に訴え、この改善がブルジョアジー固有の特質を助長する。(5) 資本主義は、ひとたび生まれると累積的に成長し、制度は精神を育て、精神から制度が生じ、企業方法の合理性はさらに完全なものとなる³²⁾。

ミッチェルは、ゾムバルトの研究を経済史と社会学との折衷であると捉え、この融合をめぐる

28) *Ibid.*, p. 31.

29) *Ibid.*, pp. 32-33.

30) *Ibid.*, p. 33.

31) *Ibid.*, p. 34.

32) *Ibid.*, pp. 35-36.

は、特性ばかりでなく弱点も指摘した。例として、彼の精神進化の分析は未熟であるという社会心理学者の主張、細部に誤りがあるという歴史学者の考えを挙げた。他にも、僅かな証拠に基礎づけて、自分に合った一般化を行うと批判する者もいるという。状況が思考習慣を広めるから、その状況を説明し、思想の背景を明らかにしなければならない。それゆえゾムバルトの研究は、やり直しの必要があるとミッチェルは考えた。しかし著作から推論すると、ゾムバルトは経済学の進歩に寄与したことが了解されるであろうと捉えている。経済過程の現在の作用と累積的変化を同時に説明することで、経済史と因習的な経済理論を混和することに接近したと見ている³³⁾。

ウォルター・リップマン (Walter Lippmann) は、ミッチェルによると、「フロイト派」に忠実であった。彼は人間性の既知の洞察力を利用して、現実の問題を論じているが、その考察は、ヴェブレンの『製作本能論』 (*The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*) のなかで極めて明確に述べられているとミッチェルは指摘した。リップマンは今日のアメリカにおいて、ほとんどの人々がヴェブレン同様、「生得の本能に鑑みて、制度体系を修正するようという、回避できない要請に反して養育されることがよくある³⁴⁾」状況にあったと述べている。国政の主要課題は、「人類の心の要求を満たす形式や制度を生み出すこと³⁵⁾」であると定め、そうして本能が良き目的に向かって機能するよう、制度の修正を図った。

リップマンが、悪の存在を法によって禁じても無駄であり、欲求を根絶することはできないと考え、そのため悪に代わって、ウィリアム・ジェームズ (William James) のいう「道徳的同値」を

重視したのではないかとミッチェルは捉えた。

この前提を正当化するのがフロイト学説の「昇華」である。フロイト派の心理学者は、「物質的な富を持ち出す。『道徳的同値』の理論はしっかりとした基礎ができており、物質とはほぼ同じ量のエネルギーが生み出すのは、犯罪・文明、芸術、徳、狂気、渴望、宗教であると信ずるに足りる十分な理由を富は与えてくれるからである。個人各々において原初的違いは小さい。訓練と機会は、主に人間の渴望がどのように発生するか決定する。ひとりになる、あるいは無学で村八分にされると、訓練と機会がある野蛮な形あるいは病的な形で噴出する。情熱に理性的な関心を与えることによってしか、破壊的な力を免れることはできない³⁶⁾。」

リップマンによれば、「政治家の資質は、その綱領の分別に左右されるはずはない。大衆感情を知り、組織し、感情を政治の原動力にしなければならない³⁷⁾。」また、「社会神話」のソレル学説から学んだことにより、「現代の科学や現代の合理主義のなかで、依然として神話を作っている³⁸⁾」と述べている。過去の信条は強力な神話であり、現在の信条でもあり、将来の信条でもある。現在必要な神話においては、社会を再構築する努力、案出・順応・構成能力が重視される。おそらくその目的を達成するための最良の神話は、すなわち「社会は、人間が利用するために人間が作り出し、改良は、実験によって啓蒙的価値を示すとき適用されることになる発明である³⁹⁾。」

ミッチェルは、「概してリップマン氏が受け入れ利用する、人間性・社会制度の一般的概念および人間の遺伝能力と後天的性質との関係の一般的概念は、ソーンダイク、ウォーラス、ヴェブレンと同一である⁴⁰⁾」と捉えた。フロイト心理学を土台として利用したリップマンの「昇華」の理論に

33) *Ibid.*, p. 37.

34) Walter Lippmann, *A Preface to Politics* (New York: Mitchell Kennerly, 1913), p. 24.

35) *Ibid.*, p. 86.

36) *Ibid.*, p. 51.

37) *Ibid.*, p. 220.

38) *Ibid.*, p. 230.

39) *Ibid.*, p. 243.

40) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 40-41.

よれば、本能的衝動は、個人の関心が集中する点に応じて、良き活動か悪しき活動かのいずれかを引き起こす。ミッチェルは、『人間の原初的性質』(*The Original Nature of Man*) がリップマンの著作より前に刊行されていたなら、彼はこの事実をソーンダイクから学んだであろうし、ジョルジュ・ソレル (Georges Sorel) から取り入れる社会神話の理論のもっともな部分は、ヴェブレンの論文「近代文明における科学の地位」(“The Place of Science in Modern Civilization”) から既に『製作本能論』以前に知っていたであろうと考えた⁴¹⁾。

ウィリアム・E・ウォーリング (William English Walling) が、社会組織の変化を予測しようとする点にミッチェルは注目し、彼の考えを解釈した。それによると、イングランドで自由党は、小資本家自らが大資本主義者の乱用とみなすものを抑制しようとしている。国家資本主義は、労働を最も重要な自然資源として保護しようとしている。労働者は機械であり、大きな自由を得られると最も効率的に働く。それゆえ労働者階級に、国家資本主義の方が自由を与える。

ウォーリングは、「ある程度、このように民主主義を拡大させることによってこそ、国家資本主義は、漸次国家社会主義に変わっていく⁴²⁾」と述べている。この変化により、労働党は政権につくなら、彼の考えでは、支持母体である賃金所得者・給料生活者の立場をゆるぎないものにしようとする。

ウォーリングは、ミッチェルの見解では、労働階級内部での熟練者と未熟練者との争いが、国家社会主義のもとでは政治の中心問題となる運命にあり、この争いが完全な民主主義をもたらしている⁴³⁾。

ウォーリングの予測が依拠する人間性の概念は、

ミッチェルの考えによれば、ソーンダイク、ウォーラス、ヴェブレン、ゾムバルト、リップマンの主張する概念とは異なっており、経済理論家の大部分が暗黙的に主張した概念に似通っている。ウォーリングの期待が暗黙的に基礎づけられている仮定は、現在と未来の政治行動を規制する要因が、経済的利己心を明白に理解することと、その利己心に従おうと固く決心することである⁴⁴⁾。古典派経済学者の姿勢で、自身の体系のなかに経済的利己心の追求を制限する道を開いている。これらの制限は教育が拡大するにつれて弱くなるため、ウォーリングは社会的流動性を将来の未熟練労働者階級に帰する⁴⁵⁾。

翻ってミッチェルは、「政治理論家は人間を計算器として扱ってはならない⁴⁶⁾」とし、ウォーリングの著作は「純粋理論」の優れた作品であるとしたうえで、「『純粋理論』は、政治の進化から何を期待するであろうかという指針は、企業活動から何を期待するであろうかという指針と比べてもはるかに当てにならない⁴⁷⁾」と述べる。

ミッチェルの考えでは、パーミリー、ソーンダイク、ウォーラス、ヴェブレン、リップマンは当然ながら、そしてゾムバルトやウォーリングでさえある程度、人間活動を解釈しようとしていた。向性、反射、本能、知性、個人の原初的能力と後天的能力との関係、人種の天賦の才や社会制度が、文化的に演ずる役割を研究することは、経済学にとって非常に重要である⁴⁸⁾。ミッチェルは、論文の終わりこう述べる。

「快樂主義は、人間がどのように動作するか、その理論を提供したがゆえにこそ、経済学に強力な影響を及ぼした。現代の心理学者は、これまで以上に健全なタイプの機能心理学を展開しているがゆえにこそ、経済学者は心理学者の研究から学

41) *Ibid.*, p. 41.

42) *Ibid.*, p. 43.

43) *Ibid.*, p. 44.

44) *Ibid.*, p. 45.

45) *Ibid.*, p. 45.

46) *Ibid.*, p. 46.

47) *Ibid.*, p. 46.

48) *Ibid.*, p. 47.

ぶと同時に、その研究に加わることを期待するだろう。しかしこの機会を捕らえる際、経済学は新たな性格を帯びるだろう。金銭的論理体系、つまり存在しない状況下での静態均衡の機械論的研究ではなくなり、人間行動の科学となるだろう⁴⁹⁾。」

Ⅲ 行動科学としての経済学

経済学者は心理学に依存しているばかりでなく、心理学の発展に寄与しているという立場から、ミッチェルは、経済学者が人間性に明確な形を与える活動を取り扱おうと考え、様々な文献をサーベイした⁵⁰⁾。取り上げた文献は、パーミリー、ソーンダイク、ウォーラス、ヴェブレン、ゾムバルト、リップマン、ウォーリングであった。これらの研究者たちをめぐるミッチェルの解釈は、次のようにまとめられる。

パーミリーによれば、向性、反射行動、本能的活動から成り立っている知的行動は、経験の結果として新しい方法で組み合わせられている。

ソーンダイクは、人間性における本源的要素を選択し、組み合わせ、修正するのが養育であると考えた。

ミッチェルは、ウォーラスの貢献を、その独自の「複合素質」の解釈に見いだした。ソーンダイクとウォーラスの見解の一致を指摘しつつ、複合素質を後天的要素がないものとして扱うことに疑問を呈した。

ヴェブレンの本能概念に対しては、ウォーラスに類似しているものの、パーミリーやソーンダイクとは異なっているとした。本能的活動は目的的であり知的である。知性や習慣を通して本能的行動は累積的に修正され、世代から世代へと伝えられるから、習慣的要素は絶え間なく変化する。そ

れゆえ本能と制度との間に対立が生ずる。ヴェブレンはこの過程に注意しつつ、石器時代から20世紀にかけて製作本能の演ずる役割を考察し、制度の性質の変化過程を明らかにした。

ミッチェルは、「精神史」がゾムバルトの経済史を特徴づけていると考えた。資本主義は思考・活動習慣の複合体であり、混血種である資本主義的精神は、営利企業の精神を市民の精神に交配することで育てられてきた。ゾムバルトは、この混血種の史的源泉を、生物学的・道徳的な資本主義の精神および社会状況に求めた。

ゾムバルトの人間文化の研究は、経済史と社会学との折衷である。ミッチェルは、経済史と因習的な経済理論を混和することに接近しているものの、社会心理学・歴史学の側面からの批判を挙げたり、制度分析が十分になされていない点を指摘した。

リップマンは「フロイト派」に忠実であり、本能的機能が良き目的に向かって機能するよう制度の修正を図った。その際フロイト学説の「昇華」を拠り所として、ジェームズの「道徳的同値」を重視したり、ソレルから社会神話の理論の一定部分を取り入れたりした。こうした点をミッチェルは、ソーンダイク、ウォーラス、ヴェブレンから多くを学んだ結果だとして捉えている。

ウォーリングは、ソーンダイクらの人間性の概念ではなく、経済理論家の大部分が暗黙的に想定する概念に依拠して、社会組織が国家資本主義、国家社会主義、民主主義に漸次変化していくと予測した。ミッチェルは、ウォーリングの著作にある「純粹理論」の側面における優越性を認めながらも、企業活動ではなく政治の進化に基づいて予測している点に不満を表した。

ミッチェルが取り上げた研究者は、全てが人間活動を解釈している。したがってミッチェルは、機能心理学が発達している現状に鑑みれば、経済学の性格は金銭的論理体系から人間行動の科学へ改まると確信するに至ったのである。

さてアラン・G・グルーチャー（Allan G. Gruchy）

⁴⁹⁾ *Ibid.*, p. 47.

⁵⁰⁾ Cf. Erik Angner and George Loewenstein, "Behavioral Economics," in *Philosophy of Economics*, edited by Uskali Mäki (Amsterdam: North Holland, 2012), pp. 641-689; S. B. Lewin, *op. cit.*, pp. 1293-1323.

によれば、「哲学者については、その心理学理論が、自ら組み立ててきた類いの哲学体系を主に明らかにしたとまさに言われてきたように、経済学者についても、人間性の理論と自らが構築する類いの経済学体系の間には、直接的な関連があると言えるだろう。心理学の理論を立てることと社会哲学・社会科学との関連におけるこの重要な一般化は、ミッチェルの心理学上の考え方とその非因習的な経済学との間に見いだされる相互関係によって、非常に上首尾に例証される⁵¹⁾。」そしてグルーナーは、「ミッチェルの経済学を理解するのに、彼の科学の心理学上の土台をめぐる見解を、正当に評価することほど重要なものはない⁵²⁾」と主張した。

実際、ミッチェルはこう述べている。

「人間性の概念は、経済学よりもむしろ心理学の主題とみなされるのが普通である。しかし経済学は、人間活動の一定の様相を論ずる科学である。経済学が社会科学のひとつであることは、現今では多少なりとも明白に理解されつつある。また社会科学は全て一般的な問題に関与している。つまり人間は、社会のなかでどのように行動するかという問題である。これは社会学、政治学、人類学と緊密に関連づけられている。法学、そしていうまでもなく心理学と決定的な関係がある⁵³⁾。」

このようにミッチェルは、経済学と隣接諸科学、取り分け心理学との関係を極めて重要視し、人間行動の心理学上の土台に関心を寄せた。正統派経済学者と異なり、経済学者が心理学を無視する、あるいは「心理学を経済学から切り離す⁵⁴⁾」ことは誤りだとしたのである。「経済学者たちの分析に対して、より適切な心理学上の土台⁵⁵⁾」を模索

し、経済学者が心理学を摂取するばかりでなく、心理学の発展に資する⁵⁶⁾ことを望んでいる。

エリック・アングナー (Erik Angner) とジョージ・レーベンシュタイン (George Loewenstein) が述べるように、「ミッチェルのような制度主義者は、より妥当な心理学が取り入れられるなら、より良い経済学が生み出されると信じた⁵⁷⁾。」ミッチェルは、「現代の経済学は現代の心理学とも一致している⁵⁸⁾」とし、当時の最新の諸文献を渉猟した結果、その妥当な心理学として機能心理学を想定したと考えられる。

ミッチェルの見解では、「心理学者の主張によれば、人間は、膨大な生得の反射、本能、能力から始まる。代々個人間では、無数の相違を伴いつつ受け継がれていくが、種に関してはたいして変化せず受け継がれていく。……もって生まれた能力のなかには学習能力がある。つまり能力とは、最初からある無数の性向の間で無数の『組み合わせ』を作るものである⁵⁹⁾。」行動は、本能の見地から説明することはできない。考慮すべきは、本能それ自体ではなく、経験の結果としての本能の間で、作られる組み合わせである。本能的要因の組み合わせが行動を規定する。実質的に不変の要素の間で、組み合わせがこのように変化するからこそ、文明人の行動は未開人と差異化する。組み合わせは、主に他人と交流する過程で作られる。

換言すれば「正式な教育や非公式教育によって、人間は自らが属している社会集団に流布している概念のかなりの部分を、程度の差はあれ理解し利用するよう漸次教えられる⁶⁰⁾。」標準化した支配的な社会習慣は、各世代が修正しつつ新たに学習

51) Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought: The American Contribution* (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1967), p. 254.

52) *Ibid.*, p. 253.

53) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*, Vol. I (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1967), pp. 31-32.

54) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 361.

55) W. C. Mitchell, "Human Behavior and Economics," p. 2.

56) Cf. *Ibid.*, p. 3.

57) E. Angner and G. Loewenstein "Behavioral Economics," p. 17.

58) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 169.

59) *Ibid.*, p. 169.

60) Wesley C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part II," *Journal of Political Economy*, Vol. 18, No. 3, March, 1910, p. 203.

していく。それゆえ社会習慣によって、今日の行動は以前と異なってくる。生得能力はほとんど変化しない。「本能という資質は、世代から世代へと実質的に同じ形で遺伝的に受け継がれる⁶¹⁾。」現在の生活が、穴居生活の祖先と異なっているのは、累積的变化の過程を通して、生得能力を養育する効果的な様式を発展させてきたからである。当時の最新の心理学に照らして、人間性の変化は大部分が文化の進化によると捉えられる。

したがって人間性は、最初から引き継がれてきた既製のものではなく⁶²⁾、社会が生み出したものがほとんどである⁶³⁾。「現状を説明するうえで、経済学者は、現代人が使用するのを漸次学習してきた概念があたかも当然のこと、つまり人間として生まれつき備わっている能力の不可欠な部分⁶⁴⁾」として扱うことはできない。

ミッチェルは上述の基本的視点を踏まえ、習慣および制度が本能からどのように発生するのか、その過程を丁寧にたどった。そして人間の原初的性質を的確に捉え、その性質が経験を重ねていく過程で修正されていくことを示した。ただし、この見方は経済学者が人間行動を研究する際の単なる出発点に過ぎないという。それゆえ「あたかも経済学者が、自身の心理学上の概念全てを心理学者から取り入れているかのように、あるいは取り入れることができるかのように述べることは……未熟である。経済学は、経済行動を論じているなら、自称心理学者の行動科学一般に対する貢献を越えなければならないからである⁶⁵⁾」と述べ、実

際に独自の行動主義的考え⁶⁶⁾に基づいて経済行動の理論を構築し、その考えを展開していくなかで、同時に心理学にも貢献していったのである。

経験と環境が作る本能的要因の組み合わせのなかで重要なのが、世間一般の組み合わせである⁶⁷⁾。世間一般の社会習慣が制度だからである。換言すれば、広く行き渡り高度に規格化されている社会習慣のなかで、比較的重要なものが制度である。心理的実在であり、観察中の共同社会で支配的な思考・活動の習慣であり、客観的に観察できる現象である。また制度上の行動様式を通して現れるのが生物学的動因である。生物学的動因および理性は、社会的行為形態を通して作用し、制度が行動を形作っている。経済学者の関心は、行動のなかで本能的というよりむしろ制度的な部分にある。内観的な経済行動の研究法は「最も頼りにならな

66) 因みにグルーチャーはこう述べる。

「ヴェブレンと異なり、ミッチェルは人間性を分析する際、思弁的であるよりむしろ経験的である。ヴェブレンの本能心理学をほとんど利用せず、ジョン・B・ワトソン (John B. Watson) のより行動主義的見解の方を好んで取り入れている。この見解は、ミッチェルが経済科学の心理学上の土台を革新しようとしていたのと同時期に発展しつつあった。」A. G. Gruchy, *op. cit.*, p. 255; Cf. John M. O'Donnell, *The Origins of Behaviorism: American psychology, 1870-1920* (New York: New York University Press, 1985); Laurence D. Smith, *Behaviorism and Logical Positivism: A Reassessment of the Alliance* (Stanford: Stanford University Press, 1986); Phillip A. Mirowski, "The Philosophical Basis of Institutional Economics", *Journal of Economic Issues*, Vol. 21, No. 3, September, 1987, pp. 1001-1038; Geoffrey M. Hodgson, *Evolution and Institutions: On Evolutionary Economics and the Evolution of Economics* (Cheltenham: Edward Elgar, 2000); Malcolm Rutherford "Understanding Institutional Economics: 1918-1929," *Journal of the History of Economic Thought*, Vol. 22, No. 3, 2000, pp. 277-308; Malcolm Rutherford, "Institutionalism Between the Wars," *Journal of Economic Issues*, Vol. 34, No. 2, 2000, pp. 291-303.

67) Carl N. Degler, *In Search of Human Nature: the Decline and Revival of Darwinism in American Economic Thought* (New York: Oxford University Press, 2000).

61) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*, Vol. II (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969), pp. 782-783.

62) Wesley C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part I," *Journal of Political Economy*, Vol. 18, No. 2, February, 1910, p. 111.

63) W. C. Mitchell, "Human Behavior and Economics," p. 3.

64) Wesley C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part II," p. 204.

65) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 361.

い⁶⁸⁾」から、経済学は変化しつつある制度に現れる行動の科学となり、行動法則を経験的に分析する。

そしてミッチェルによれば、制度は個人活動に権威を振るうものである。それゆえ社会体制は、思考および活動を規格化する原因となり、個人活動を共通の型に入れて作る。制度は、個人行動を導く際に強力な作因となるので、個人行動を適切に説明するには制度的観点から行わなければならない。ピエル・フランセスコ・アソ (Pier Francesco Asso) とルカ・フィオリート (Luca Fiorito) が述べるように、「経済主体は一連の新しい習慣を過去の経験から展開する⁶⁹⁾。」

アソとフィオリエートの主張を見るまでもなく、「……人間行動は、厳密に機械的に解釈すれば、物理学と同じ分野に属するとみなされた⁷⁰⁾。」ミッチェルは、自然科学の方法に則って、人間行動の研究に客観的・科学的に取り組んだ。

それによると、社会科学は「今までのところ子供⁷¹⁾」であり、「未熟で思弁的⁷²⁾」であり、「力学と

いうより形而上学、化学というより神学に近い⁷³⁾」ものであり、思弁に盲目的に導かれてきた。ただしミッチェルが考える社会科学は、一種の神学と自らがみならずダーウィンタイプの思弁ではなく、自然科学、すなわち物理学・化学の方法に従わねばならないはずである⁷⁴⁾。「物理学・化学は、石鹼の泡のような豪華な体系においてではなく、作業仮説と観察される過程との関連をめぐる観察と試験——常に批判的な試験——という忍耐強い過程によって築き上げられてきた⁷⁵⁾。」かくして最も進歩的な自然科学の分野で用いている方法が、社会領域に拡張されるべきであると述べた。行動主義的考えによって、自然科学の方法を範とする。実証主義は、行動主義的考えと同一の志向性を有していると認識している。

こうしてミッチェルは、「人間の心およびその作動形態を知ることは、……不可欠な素養の部分である⁷⁶⁾」という立場から、行為の実証科学を展開した。

68) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 254.

69) Pier Francesco Asso and Luca Fiorito, "Human Nature and Economic Institutions: Instinct Psychology, Behaviorism, and the Development of American Institutionalism," *Journal of the History of Economic Thought*, Vol. 26, No 4, December 2004, p. 461.

70) *Ibid.*, p. 461.

71) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 51.

72) *Ibid.*, p. 51.

73) *Ibid.*, p. 51.

74) J. M. Clark, *op. cit.*, p. 413.

75) *Ibid.*, p. 413.

76) W. C. Mitchell, "The Rationality of Economic Activity, Part I," p. 112.